

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』第十八卷「人文科学（一の八）」

民俗学、民族学、文化人類学、文明・宗教の発祥・展開と人間の発達
(一)

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第十八巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、民俗学、民族学、文化人類学等、とりわけこれらと人間の発達過程および岩崎個人の成長過程との関係の考察に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 ○歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 喪失した共感覚

第二部 僕の共感覚を理解していただく上で

第三部 対女性共感覚

第四部 私の仮説「共感覚原帰属性仮説」

第五部 乳幼児総共感覚者説

第六部 日本的共感覚人間学（仮称）とは

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 直観像記憶と共感覚

第二部 「直観像記憶と共感覚」のページ

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 喪失した共感覚

二〇〇五年三月八日 起筆

二〇〇五年三月十五日 公開

二〇〇六年五月四日 更新

二〇一四年七月十五日 更新

二〇一七年三月十三日 最終更新

特設サイト「知覚・共感覚」

持っていない共感覚が無いと言えるほどの多くの共感覚を持つ私にも、幼少から今までに失ってしまった共感覚があります。それを挙げておきます。

●共感覚による計算能力

小学二年生の頃、算数の授業中に先生から「サイコロ（立方体）の展開図を全て見つけましょう」という問題が出されました。この問題を僕が共感覚によって二分弱で解いて先生のところまで持っていく、十一通りの全てが正解だったため、そのご褒美として、残り

の時間はクラス全員が休み時間となりました。この思い出は、自分の共感覚が人から愛された嬉しい思い出の一つとして、今も自分の中に残っています。

自分がこの問題をどうやって解いたか、載せておきます。

（始め）

立方体の面は六つある

← 共感覚色に変換



← 漢数字に変換・・・「三六五八六九五八二九四七」

← 再度共感覚を使い、これらを並べ替えてできる二文字の大和言葉

に変換・・・「あす（明日）ひと（人）あか（赤）むら（村）と

き（時）しほ（潮）こひ（恋）よる（夜）はな（花）さき（先）

うみ（海）もり（森）」

← さらに並べ替える・・・「きとらとりきしるはあみもこほすひうひ

さなあよかむ」

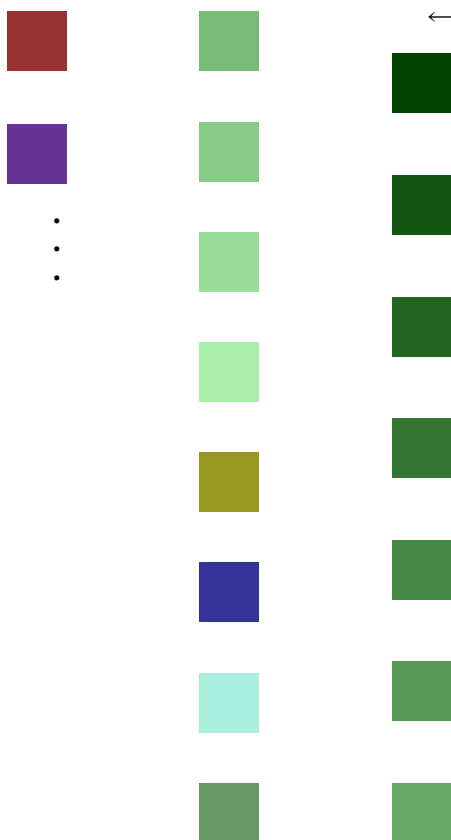
← 何度かつなげる・・・「きとらとりきしるはあみもこほすひうひさ

なあよかむ・きとらとりきしるはあみもこほすひうひさなあよか

む・・・」

← もう一度漢数字に変換・・・「五五五五五五五五七三二八二

六・・・」



←最初の十一個だけが美しいグラデーションを呈する

←立方体の展開図は十一通りである

(終わり)

今自分が見ても「一体何がどうなっているんだ」と思うこのよう
な計算方法は、幼少期には全ての人が持っているものでしょうし、
それが成人しても残っているような人はサヴァン症候群と呼ばれ、
現在、この呼称を与えられている人は世界に数十人しかいません。
(共感覚者のダニエル・タメット氏、キム・ピーク氏など)
私の場合、日本人にしかあり得ない解き方をしているのが特徴だ

と思いますが、成人してから、このような能力をもの見事に失い
ました。しかし、個々の数字の共感覚色だけは完全に残っています。

十八歳頃からは、四則演算については、ほぼ他の現代日本人と同
様の数概念による抽象的思考で解いています。簡単な計算は、今で
も共感覚演算で行いますけれども。

ちなみに、有名な共感覚者ダニエル・タメット氏は、数字を以下
のリンク先のような風景として見ているそうです。

◆ダニエル・タメット氏の数字についての共感覚

氏の「 $53 \times 131 = 6943$ 」の計算方法も載っています。まず、53と
131をそれぞれの共感覚色・共感覚形に変換し、その間に出現する
共感覚色・共感覚形が6943の色と形をしてるので、答えは6943
だということです。

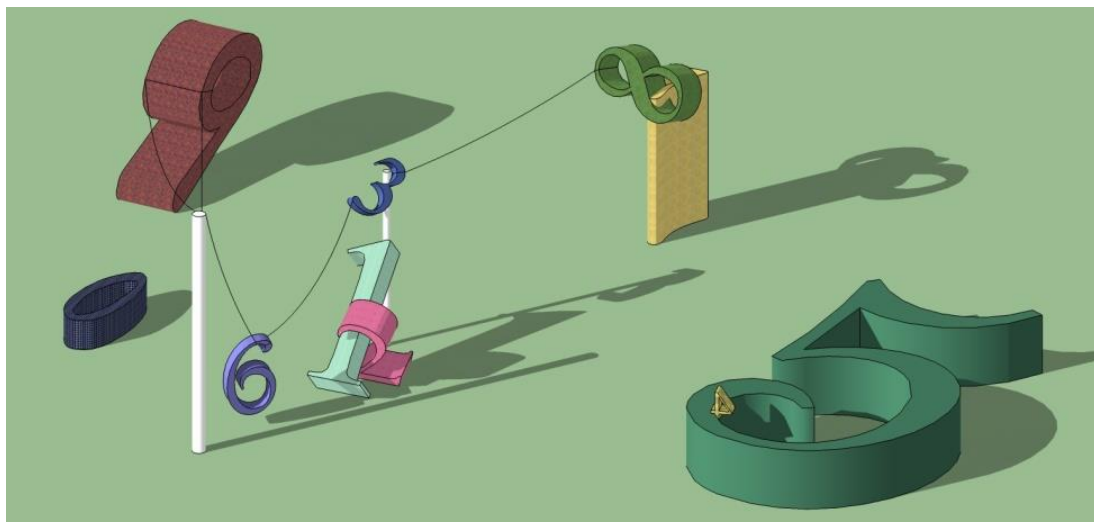
ともかく、「最初の十一個がグラデーションだから、答えは十一通
りだ」という先の私の主張と同じようなものです。ただし、アラビ
ア数字そのものは、元はインド・アラビア・西洋文明圏のものであ
り、今でも世界の数億人がアラビア数字を使用していませんから、
タメット氏の場合は、ある時代以降の西洋人、あるいは一部の近現
代人にしかあり得ない解き方をしているのが特徴だと言えます。

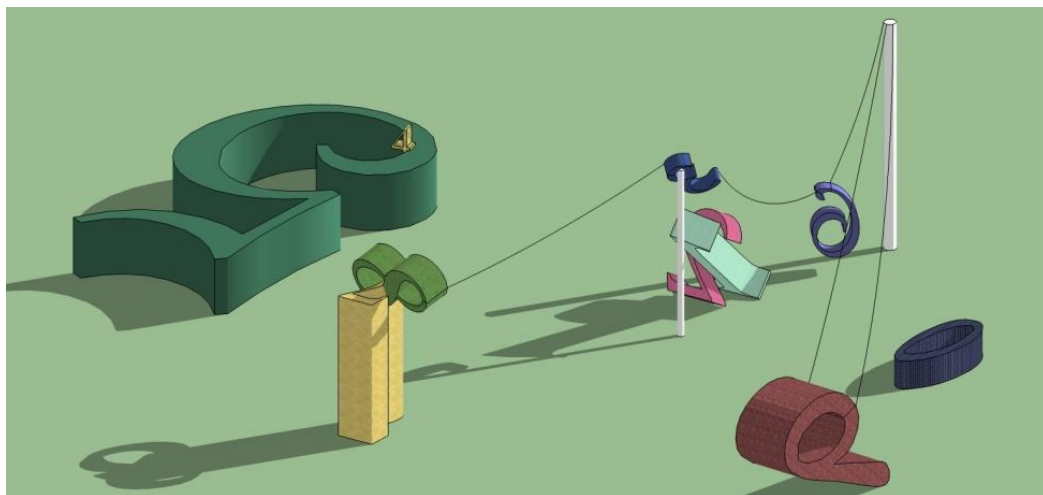
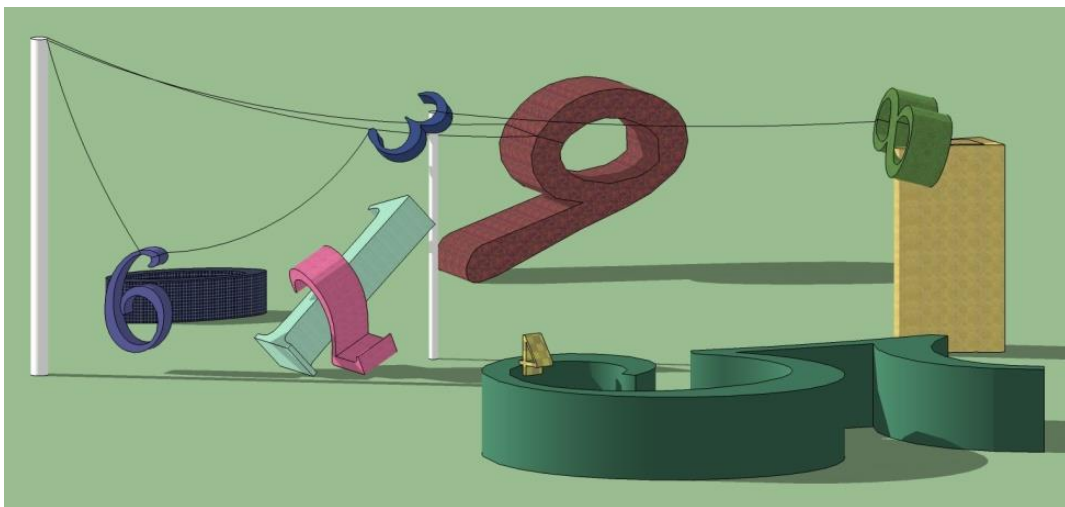
タメット氏の場合も私の場合も、生得的な知覚と後天的な識字能
力・思考との両方を図らずもフルアクセルで発揮してしまうタイプ
なのだと思います。

しかし、タメット氏の場合、私が失ったそのような共感覚的な演算能力を成人しても持っているのがすばらしいと思います。それどころか、円周率や外国語の暗記が極めて得意であるなどの、典型的なサヴァンの能力を見せています。普通は、早い人は三歳や五歳あたり、遅い人でも十代・二十代のどこかで、このような能力は急速に衰えてしまいます。

以下は、二〇一二年九月十四日時点での、数字についての私の共感覚です。

◆共感覚立体画像（二）「数字についての共感覚」





それから、共感覚教育を我が子に施したいと考えている世のお母さん方から、しばしば「共感覚を使って一流大学に受かる方法はありませんか？ どうすればウチの子にも共感覚の才能が身に付きますか？ よその親子よりも特殊な天才性で一步リードしたいです」といったご質問・ご相談を頂くのですが、残念ながら、人間にとって重要なことはそういうことではないと私は考えています。

入試に受かるために必要なことは、「勉強ができること」や「教養があること」ではないと思います。「学業の成績がよいこと」です。そして、「その学校の入試問題の癖に媚びること」、そして、「どんなに特殊な人も、同時代の受験方式の常識に合わせること」です。

先の私のような回答を書いたら、誰よりも先に答えが分かっていたとしても、入試という「法」の中では「違法行為」になります。「合法的に」一流大学に入って共感覚を思いきり研究したいか、一流大学に最初から入らないか、などを子どもに自由に選んでもらうか、まずは親・大人が自分で大学の運営者になって、共感覚の子どもたちを特殊能力試験や面接試験で合格させる入試方法を整備するかの、どちらかしかないと思います。

●共感覚による強い排卵感知能力

思春期を少し過ぎたくらいまでは、女性の排卵を感知するのに、

目視を必要としませんでした。どういうことかと言うと、衣服を着た排卵期の女性がそばを通っただけで、自分が女性とは別の方向を向いている場合であっても、排卵を把握できたという意味です。また、周辺の何人かの女子生徒が初潮を迎えたのも、共感覚で見えました。

この共感覚と閃輝暗点が併発したときには、すぐに保健室に行って寝込んでいました。見えているものは美しいのですが、身体はかなりの消耗を伴うためです。

その後は、排卵感知能力だけが衰えていき、今では排卵感知よりも月経感知のほうが頻度が相対的に高くなり、おまけに排卵感知にも月経感知にも、ほとんどの場合は目視を必要とするようになっていきます。排卵というのは、全ての過程が女性の内性器の中で起こることですから、到底、普通の五感では感知不可能であることは明らかです。

一方で、月経は、「外界」に近い部分で起こることですし、何より排出物を伴いますから、極端に言うと、無難な五感でも感知できます。つまり、私とて、次第に「共感覚←五感」という変遷過程を辿っていることは明らかで、さらに月経感知能力も昔よりは衰えてきています。

（もちろん、一般の男性は、衣服を着た女性の月経もあまり感知できないようですから、その点では、私の共感覚は今でもいわば「驚異的」なのかもしれません・・・。）

なお、女性に対する類似の共感覚をサイトで告白されていた男性

には、私以外にもN2氏などがいらっしやいましたが、残念ながら
どのサイトも閉鎖されました。

<http://www1.coralnet.or.jp/nobuyosi/> : N2氏の共感覚サイト

第二部 僕の共感覚を理解していただく上で

二〇一〇年十月四日 起筆、攔筆、公開

二〇一三年十月十七日 更新

以下は、僕の共感覚を理解していただく助けになる良い文章だと思
っています。数年来交流のある、松本孝幸先生の文章です。僕の
親世代の男性です。

僕は、特殊な感覚を持った人間として、色々な研究者・専門家か
ら関心を持たれています。けれども、嬉しくない場合は一つもない
と言っても、最も嬉しい形での関心の持たれ方というのは、僕にも
あります。

心をこめて人に接し、平易な日本語で丁寧を書く作業が、いかに
知的で深遠なことを、以下の文章は教えてくれるように思います。

● 『音に色が見える世界』 岩崎純一

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/09yonhon10.html>

● エロス核と対女性共感覚

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/kokoro9.html>

● 嗅覚と共感覚

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/watson100.html>

● 心的現象論と共感覚

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/ryoukaiz29.html>

● アフリカのとうとうと (10)

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/indian107.html>

● 「視覚で考える」という記述 (1) (2) (3)

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/utigawajihai337.html>

● 「共感覚で考える」ということ

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/utigawajihai338.html>

● 共感覚と自閉症

<http://matumoto-t.blue.coocan.jp/utigawajihai339.html>

二〇一三年十月十七日 追記

この松本孝幸先生の文章へのリンクは、以下のページにまとめました。(二〇一八年七月八日に追記：現在、これらのリンクはアーカイブに収録。)

<http://iwasakijunichi.net/joho/index2.html>

第三部 対女性共感覚

二〇一一年六月十九日 起筆、攔筆、公開

「対女性共感覚」とは、私の造語であり、我々ホモ・サピエンスの男性が女性に対して有しうる共感覚の総称である。これには、「女性の排卵期が色で見える」、「女性の月経期が音で聞こえる」、「妊娠中の女性のそばにいと、一緒につわりを覚える」などが含まれる。

現在、私自身を含め、私が自分のウェブサイトを通じて知り合った成人男性数名がこれを有し、また男児においては保持の確率が極端に高く、母親からの報告が私のもとに寄せられている。成人男性の場合、主に発達障害を伴う男性がこの感覚を喪失せずに保っているのが興味深い。

この共感覚と大脳皮質的な高次知能とが反比例の関係にあると思われる点では、この共感覚の中樞は大脳辺縁系、基底核、脳幹、中脳、小脳などにあると思われる一方、調査次第では、この共感覚を

多くの男性が維持したままいわゆる高次知能を獲得している部族が、アフリカ・東南アジアなどに存在する可能性があると思う。

なお、「親女性共感覚・溶女性共感覚」と名付けなかった理由は、著書『私には女性の排卵が見える』に詳細を書いてある。

第四部 私の仮説「共感覚原帰属性仮説」

二〇一一年六月十八日 起筆、攔筆、公開

私が今のところ考えるに至っている「共感覚原帰属性仮説」は、以下の通りである。(半ば自分のメモとして書いたものでもある。)

「共感覚は、人間の幼児には必ず存在し、人間個体の発生と成長に伴って減衰する。減衰は、厳密には西洋的自我を発見した後人間個体にのみ生じている。五感をつかさどる脳領域の観測上の分裂及び五感の知覚上の分裂は、その人間個体の母語が有する格機能の主格優勢性が認識させる。また、このことは、印欧語族とプラトニズムの折衷されたラテン語族において最初に自覚された。個体発生における系統発生の反復が、出生後の個体成長とその種の成体の経年変化に延長できるならば、同一人間個体の成長過程における共感覚の減衰は、西洋的自我発見以降の人類種における共感覚の減衰を反復する。このため、現行の自閉症・発達障害・アスペルガー症候群者は、すでに系統的に共感覚的知覚の保持者である。この共感覚の

「持ちやすさ」は、鬱病や解離性障害などの一見後天的と思われる心的外傷の「受けやすさ」と同義であつて、従つて、およそ重度の鬱とは、脳機能それ自体として共感覚の発生機序に同一である。ここで、共感覚の産出源を脳に限らなければ、共感覚は、人間の原帰属性であるばかりか、全ての生物と自然物の原帰属性であり、また唯識論における阿頼耶識の原帰属性であつて、近代西洋的デカルト的自我（自己意識）の変容を伴う精神症状である解離と分裂は、自然言語の格機能の系統遡及である。最古の共感覚における最初の他者は異性であり、最新の共感覚は五感の弁証法（アウフヘーベン）的統合である。現行の「共感覚」とは、後者を指している。このような葛藤を常識（コモン・センス）とする大衆社会は、全ての生物と自然物すなわち生物全体社会のうち、デカルト以降のキリスト教圏白人社会のみであり、日本においては厳密には戦後のみである」

第五部 乳幼児総共感覚者説

二〇一一年六月十九日 起筆、攔筆、公開

「乳幼児総共感覚者説」とは、私の造語であり、「乳幼児は例外なく皆共感覚を有している」とする説である。

特に珍しい考え方ではなく、これと同様の学説は、すでに生理学方面での共感覚研究の一派において主張されている。

この学説の立証は、主に乳幼児の脳活動計測によつて行われている。今後は遺伝子研究なども行われていくと考えられるが、私としては、「調べなければ分からない」性質のものではないと考えているので、研究の激化については少なからず疑念や不安を抱いている。私の視点・関心は、「乳幼児は例外なく皆共感覚を有している」という、最後には行き着くに決まっていたかもしれないこの結論が、なぜ多くの現代人（の成人）には先験的認識として分らなかったのか。乳幼児期の記憶は、いったいどこに消えたのか」ということだと思ふ。

これと反対に、「共感覚は、主に成人のものであつて、成長過程で学んでいく高度知能の一種である」という意見や、「共感覚は、動物は持つておらず、人間だけが持つていられるものである」という意見も、私の周りで聞かれる。しかし私としては、やはり共感覚は、現代の成人よりも子供、古代人、動物のほうが強く持つていられる（いた）と思ふ。

第六部 日本的共感覚人間学（仮称）とは

二〇一一年六月十九日 起筆、攔筆、公開

私は元より「学者」という肩書は持たず、自分の持つ共感覚、自分の共感覚論・人間論について、講師として学会での講演や大学で

の授業をおこなったり、専門家と対談したり、著書を出したりして
いるだけである。

しかし、それなりに自分の共感覚論が世に出たり、言語に障害の
出ている精神疾患者による使用を目指す「岩崎式日本語」を考案し
ていくにつれて、私の共感覚観や人間観というものが持つ特徴や、
現行の生理学全般における共感覚研究者の学説との共通点と相違
点・齟齬というものも、明確になってきた。

そのうち、共感覚仲間などから「あなたの共感覚論・人間論は、
どう見ても一つの新学問体系を成しているので、固有名詞を冠して
みてはどうか」と（本気半分、冗談半分だと思いが）言われ、自分
の思考体系の呼称を本当に考えてみるのも面白いだろうと思うよう
になった。それで、ひとまず「日本的共感覚人間学」とすることに
した。

「日本的共感覚人間学」とは、私が思い描いている「共感覚原帰属
性仮説」というものを元に、共感覚を中心とする日本的な人間学を
構築する一連の学術的思考体系の呼称で、分野は哲学・文学・日本
語学・言語学・和歌論・心理学・文化人類学・神道・仏教学・音楽
学・数理論理学・素粒子物理学・認知科学・神経科学などを扱う。

と言っても、私の主催と学説のもとに集まることが主旨ではなく、
現在のところ一個人として直観的洞察でとらえているにすぎない同
仮説が普遍的正当性を持つか否かを、この仮説が扱っている共感覚
と周辺の精神症状を呈する当事者たちの協力のもと、精緻に思案す
ることを目指そうと思う。それから、協力者の力を得て、日本の重

篤解離性障害者を使用の対象とする「岩崎式日本語」を含む一つの
言語学・心理学・精神病理学・人間学の体系を完成させることを目
指そうと思う。

また、世界的に皆無であると言ってよい「日本人以外の東洋人」
の共感覚と文化結合症候群的精神症状の探究もおこない、「我々が日
本人であるとはどういうことか」についても探究したいと思う。

私は、色々な専門家から私の共感覚や脳機能の調査のため遺伝子
や血液の提供を求められていて、共感覚当事者としての著書を出し
た立场上、いずれは協力することになる時が来ると覚悟している。
私の知人の共感覚者やこの研究会メンバーにも、私と同じく、人体
組織の採取による共感覚の解明に少なからず本能的抵抗を覚える人
は多いようであるから、少し安心している。

第三編 三十歳〜三十九歳

第一部 直観像記憶と共感覚

二〇一三年七月三日 起筆

二〇一三年七月二十日〜二十三日 集中執筆

二〇一三年七月二十五日 公開

二〇一七年三月十三日 最終更新

特設サイト「知覚・共感覚」

●直観像記憶と共感覚

喪失した共感覚を書いてから、七年が経ちました。相変わらず「共感覚を用いた能力のうち、数学に関する能力が、時が経つごとに優先的に衰えている」という私の共感覚の特徴は変わっていないようです。基本的な共感覚や著書で挙げた個々の数字の色だけは今でも明確に知覚されているのが不思議なくらいです。

上記ページを書いたのち、私の元には「あまりによく分からない感覚なので、もっと分かりやすく教えて下さい」というご質問やご相談を頂きました。唐突ですが（しかも、分かりやすくなっていないかつら申し訳ないですが）、二つほど新たな共感覚の事例を紹介しておきます。

●チンパンジーと私の直観像記憶

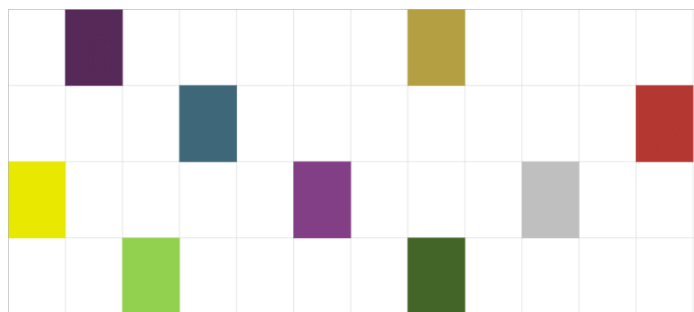
一つ目です。突然ですが、以下に三つの映像をリンクしましたので、ご覧下さい。「直観像記憶（映像記憶・Eidetic memory）」に興味のある方にとっては、面白いと思います。

私は今でも、以下の実験のようなケースでは、チンパンジーやサルに近い直観像記憶を示せる状態にはあると言えます。画面に映った1から9までの数字に瞬間的に色が付いて見えるので、その色の順番に押せばよいわけです。正答率が、体調・天候・部屋の環境に

よって違ってきますが。

そのため、「数学の解法がより一般的に」なり、喪失した共感覚にあるような「正答に直観的共感覚能力で達する解き方」をしなくなったというだけで、「数字に見ているものは何ら変わっていない」のかもしれない。

◆私自身の共感覚による直観像記憶の動画



↓YouTubeで見る

◆チンパンジー・アイとそのなかまたち（京都大学霊長類研究所）
動画集のところに以下のような色々な動画が掲載されています。

京大の論文“Working memory of numerals in chimpanzees.”

この手の実験結果の分析によく見られるのが、「チンパンジーも、数か月、数年をかけて訓練すれば数概念を理解できるようになるとが判明した」というもので、上の映像の実験もそのこと、つまりは「チンパンジーの知能」にまつわる知見の確立を狙っています。私はこれには少し疑問を持ってきました。

チンパンジーは究極の「直観像記憶家」であって、数概念を理解せずに「数字の形状」の「写真」を頭で撮り、画面を押しているだけではないかというのが、私の感じ方です。

私も、このような実験の回答において、瞬間的に抽象的・記号的な数概念を記憶してから色に対応させているわけではないです。そうではなく、瞬間的に「目と頭で写真を撮る」のです。個々の数字は見えていないです。結論から言えば、「数」が分かっているかとも、順序を答えることができます。いわば、「チンパンジーの見える世界や気持ち分かる」といったところでしょうか。

ただし、同じ「数」を表す記号であれば、アラビア数字であっても漢数字であってもサイコロの目であっても、私には同じ色に見え

ます。「6」も「六」も「……」も青紫色です。明らかに「数の大きさ・小ささ」を思惟している証拠です。この点ばかりは、私どもはや原初的な「ヒト」というよりは、現代の「人間」である証拠だと思えます。

「ならば一体、形状の“写真撮影”と数概念の理解のどちらが先なのか」といつも言われるのですが、ここが相当に説明が難しいところなのです。ほとんど同時と言うしかありません。映像で示した以上に早く色が付きます。

「感覚・知覚（低次能力）」と「思考・理解（高次能力）」とに落差を付けることを「停止」して得られる、こういったチンパンジーや私の直観像記憶は、私なら少々自分の東洋哲学趣味を入れて説明することになるのですが、西洋哲学ですと、例えばベルクソンの言う「純粹知覚」を思い出していたくのがよいでしょう。オーソドックスな日本人哲学者がよければ、西田幾多郎を読んで「純粹經驗」や「行為的直観」を学ぶのもよいと思います。

数字だけではなく、普通の文章を読むときも、私は漢字や仮名に見える色を追って読んでいますし、二冊目の拙著で「対女性共感覚」と名付けて告白した共感覚も、「直観像として女性の写真を撮っている」感覚です。小学生の頃、1990年代の国産車であればヘッドライトの形状だけで車名を当てることができていたのも、この直観像記憶によりです。

ということは、もしチンパンジーが数概念を理解せずに共感覚を用いているとしたら、「6」も「六」もサイコロの目の「●●●●●●」

●「も瞬時に異なる色彩に見えているはずですから、人間の私よりもっと多様で難しい並びの数字・文字・記号の羅列を記憶できることになると思います。」

結局のところ、上記の長い訓練において、「チンパンジーはほとんど何もやっていない（生得的な知覚能力だけで余裕で数字の順番を答えている）」というのが、私の見解です。チンパンジーが「何もできない存在」というわけではなく、「人間が訓練を施したところで、直観像記憶能力がびくともしていない存在」という意味です。

ただ「数字の形状」と「順番」との対応を、チンパンジーなりの直観像記憶・共感覚的能力・純粹知覚において再現しているだけだと私は感じます。

●天才と共感覚

ところで、『週刊現代』二〇一三年四月二十日号の「賢者の知恵」に、天才と数学と共感覚の関係にまつわる興味深い記事が載りました。

（←ネット上でも一部を無料で読めます。）

「天才」と呼ばれた人が、本物の「天才」に出会ったとき【第一部…理系篇】名門高校の神童？ 東大理Ⅲ？ それがどうした！ 大学に入って分かった「オレは大したことない」(『週刊現代』二〇一三年四月二十日号)

記事の内容としては、「自他共に認める天才で、東大入試が朝の歯磨きと同レベルにしか感じられず、余裕で東大に合格した人が、自分以上のひらめきや共感覚を持っている日本や世界の天才たちに出会い、徐々に自分の傲慢さを認め、自分の道を模索していった」という、よくありそうなパターンであり、かつ「バカと天才は紙一重」という、これまたよくあるフレーズも用いてある記事です。

要するに、記事の体裁そのものは、週刊誌らしい商業的諧謔を免れ得ない非学問的な体裁ですし、個人的に首肯しかねる箇所もありますが、しかし、挙げられている方々は素晴らしい感覚能力の持ち主であって、内容は非常に面白いと私は感じました。

共感覚者は、なぜかいつも決まりきったように「天才性」と結びつけて語られます。ある意味では、これも非常に「テレビ的・喧伝的」な発想だとは思いますが。

ただし、私も必ずしもそのような発想を良くないと思っているわけではなく、実際のところ多くの人が、共感覚者が訴える感覚世界に強く憧れているのは事実ですし、あるいは、人間そのものが常に「共感覚的・天才的な何か」を持つ子どもとして生まれる存在だからこそ、そう思うのではないのでしょうか。

今回の雑誌記事を読んで、私は極めて安心しました。この記事に登場する方々を、恐れ多くも「仲間」だと思いました。「仲間」というのが、決して「同じ東大に行った仲間」という意味ではありません。「ある問題・学問の答えや物事の結末が共感覚や直観力で見える

仲間」「周囲の東大生からも浮いていて、精神的に苦しい青春期を全国のどこかで別々に過ごした仲間」という意味です。

こういう方々は、むしろ学習障害児などの発達障害者の見ている世界や苦悩が分かるのではないかと思えます。なぜなら、私自身が、そのような子どもたちを見ていて、そうだと感じる（自分が彼らの見ている世界や苦悩を分かっていると感ずる）からです。

私は東大文科三類に入りましたが、これは数学と日本史・世界史で合格したようなものだと思います。英語・国語は、東大を受ける文系の人なら皆成績が良いのです。文系の数学は四問出題されませんが、英語・国語の成績が抜群であれば、数学は一問でも正解すれば、合格できます。私は、単に数学で三問解き、四問目も途中まで書いたので、合格できたと思えます。

しかし、私が東大数学を解くのに「頭の中で」用いていた解法は、結局は喪失した共感覚のようなものでした。先に数字の空間配置や共感覚的色彩感によって見えた答えに合わせるように、途中の微分・積分やベクトルを「設置」していくだけであって、「答えが見えない」ということのほうが私にはよく分からなかったです。

日本史・世界史についても、まずは年表を眺め、頭で年表の写真を撮っていました。これも先述の直観像記憶です。こう書くと、まるで苦労していない人間のように思えますが、ここで言いたいのは、そういうことでは全くありません。

そうではなく、「生きる上で別の苦労があるのだ」と言うだけで、共感覚による直観像記憶の保持者の方々には分かっていただけだと

思います。社会人になって、重要な会議に出ているときに、壁にかかっている絵画までが目に映り頭に入ってきて、集中できないときのことを考えてみていただけるとありがたいです。

（とは言っても、私の場合、ずる賢くなってきたのか、最近是自己の共感覚を抑え込んで職場の同僚に見せない能力に非常に長けてきたので、あまり問題がないのですが。）

ところが、このような共感覚による数学能力ばかりを優先的に失っていったところだが、私の共感覚の特徴だと思うわけです。歴史の暗記に関しては、まだほぼ昔のままのところがあります。しかし、数学能力に関しては、先の雑誌記事に挙げられた方々のすばらしい能力に及ぶべくもありません。私から見ると、挙げられた全員が天才に思えます。

私の共感覚による直観的な数学能力のなごりは、現在ほもつとメタ数学化・超数学化して、岩崎式日本語の考案時の数理論理的直観や言語哲学的直観に現れていると思えます。これらに関しては、「直観的な数学能力のなごり」というよりは「直観そのもの」と言えるかもしれません。

ただし、昔よりも洗練されてきた代わりに、雑多な面白みに欠け始めました。つまりは、昔よりは「計算高い」共感覚の使い方をしているような気がします。しかし、計算高く精神を張りつめていなければ、重要文書の法的処理や会議など、普段の仕事ができなくなるので、致し方ない面があります。

「数字や数学などという抽象概念が分かっている」とも、数字（と

いうより形状)の順序は、複数のエサの場所を巡る順序と同じように、チンパンジーには分かるのだ。人間の発達障害者の見ている世界も、それに近いところがあるのだ」と、私は思います。

結論としては、先の映像に登場したチンパンジーも、先の雑誌記事に載っている「天才に出会って打ちのめされた過去の天才」の方も、「その天才の上を行く天才」の方も、繰り上がりの足し算ができないにもかかわらずパズルやルービック・キューブがすぐに解ける発達障害者も、私から見れば、「同じ直観能力、同じ純粹知覚」タイプの、敬意を払うべき天才だと思えるのです。

私はこれらの方々ほどの能力はありませんが、同じ「直観屋」の一員としては、これらの方々の述べていらつしやること、何より気持ち様が本当によく分かります。

第二部 「直観像記憶と共感覚」のページ

二〇一三年七月二十五日 起筆、攔筆、公開

以下の「直観像記憶と共感覚」のページを設けました。

私の共感覚の映像を載せ、チンパンジーの実験の映像にリンクしました。

(二〇一八年七月八日に追記…現在はこの直前の位置に収録。)